

平成 22 年 4 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520105  
 研究課題名（和文） 美術史記述における図版機能の歴史的・理論的研究  
 —近代フランスを中心として—  
 研究課題名（英文） Studies of Function of Figure in the Historiography of Art  
 in Modern France  
 研究代表者  
 島本 澁（SHIMAMOTO KAN）  
 京都精華大学・芸術学部・教授  
 研究者番号：30154280

## 研究成果の概要：

本研究の成果として次の4点をあげる。1、18世紀から20世紀初頭における、美術書出版の動向がほぼ明らかになったこと。2、そうした美術書における図版の挿入の実際が明らかになったこと。3、同時期の美術書における図版の役割についての意味が把握できたこと。4、図版と言葉（作品説明と解説）の新しい関係を、18世紀と比較することで、理論的に把握できたこと。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000		1,300,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

## 研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：美術史、美学、美術図版、図版印刷、作品描写

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始までに、科研費を得て、美術カタログと美術全集の研究を行った。その研究を通して、大きな課題となっていたのが、美術書における言葉と作品の関係の問題であった。とくに、図版が挿入されてくる19世紀後半以降の美術書にあつて図版は、作品を説明・解説する言葉とどのような関係にあるのかが歴史的にも理論的にも重要な問題と

なっていた。そのような背景から、本研究を申請した。

## 2. 研究の目的

(1)西洋各国で美術史学が成立する19世紀は、図版印刷革命の時代でもあった。印刷技術の急速な発達によって生じたこの革命により、美術品の複製図版も精密度を増していく。19世紀の美術書の図版は、18世紀までの

エッチングに加えて、リトグラフ、小口木版、写真版画製版と展開し、世紀末には写真から直接複製される写真製版が姿をみせる。さらに20世紀には色彩写真図版が登場する。また、印刷の廉価化によって、作品の図版は大量に流通してもいく。つまり、美術史におけるヴァーチャル化の口火が切って落とされたのである。この図版印刷革命は、美術史記述の変化をうながし、さらに美術書のエクリチュールに作用する。記述が複製図版を前提することになったからである。図版を伴わない18世紀までの美術史記述に代わって、19世紀以降は言葉が図版と緊密に結ばれることの中に美術史の言説が成立することになる。この図版と記述の結びつきは、また、成立したばかりの美術史学の性格とも関係する。

(2)このような問題意識のもと、本研究は具体的に次のような目的を据えた。19世紀から20世紀初頭のフランスにおける美術書のなかに、美術史記述と複製図版の関係を実証的・理論的に探ることによって、近代の美術史言説の構造の一端を明らかにしようとした。本研究はまた、ヴァーチャル化が進む今日の美術史研究のあり方に何らかの示唆を与えることができるものとする。

### 3. 研究の方法

フランスの図書館と古書店を中心に、19世紀から20世紀初頭の美術書を調査するとともに、そこから得たデータをカテゴリー別、本文中に占める図版の割合等々を計量した。そして、その結果を踏まえて、図版の機能の理論面を考察した。その歳、18世紀の美術書との対比によって、19～20世紀初頭の図版の意味を明確にすることにした。

### 4. 研究成果

(1)本研究は、美術史記述における言葉と図像の関係を歴史的、理論的に整理しようというものであった。そこには、本研究によって言葉とイメージの関係というより大きな文明論的問題系にアプローチする可能性が開かれるだろうという期待もあったし、実際、その可能性と方向性は見えたと思っている。(2)さて、本研究自体が対象としたのは、18世紀から20世紀までの美術を扱った書物＝美術書において、言葉がどのようにイメージ＝図版と関係しているのかを具体的に探ることであった。研究の背景でも触れたように、すでに、過去の科研費における美術カタログや美術全集の研究においても、言葉とイメージの問題は、サブテーマとして浮上ってきていた。そうしたこれまでの研究も含めて、今回は19世紀から20世紀にかけての美術書発展の跡づけ、そこでの図版挿入の実態とその展開、さらには印刷史の展開といった美術書とそこでの図版の歴史的考察、さらに、図版と作品を説明・解説する言葉との関係の理論的考察を課題とした。

(3)まず、研究の歴史的側面だが、3年間の19世紀から20世紀初頭のフランスにおける美術書出版の実態調査が、ひとつのベースとなった。パリを中心とした図書館や古書店での文献調査によって、この時代の美術書がどのように加速度的に増加していったのかの実態をほぼ把握することができた。ただ量的な問題があり、計量的な数字をとらえることはできなかった。ただ、調査によって、18世紀の美術書出版と19世紀とを比べれば、50倍以上に増大しただろうことは想定できた。ともかく、19世紀が美術史における書物の時代ともなったことが確認できた。

この美術書出版の増加は、19世紀の美術

の社会的な役割と関係する。この世紀、美術館や展覧会が定着し、美術観覧の場が飛躍的に増加したからである。美術書は、そうした場と深く関係する。さらに、そうした美術書に図版が挿入されてくるのも前世紀とは異なった状況である。図版の挿入は、19世紀の印刷術の革新と深く関係する。リトグラフに始まり容易になった図版印刷は、19世紀後半の写真印刷の導入によって、より促進される。それとともに美術書のヴィジュアル化ははかられていくのである。

その一例を、展覧会カタログにみておく。旧来の言葉だけによるカタログが、世紀末に新しいタイプのカタログを生み出す。「挿絵カタログ」(catalogue illustré)と呼ばれるものである。たとえばその一点、サロン展の「挿絵カタログ」では、全出品作の2割ほどの作品が図版化され、出品作家のアルファベット順に並べられた出品一覧表のあとに掲載される。現在の展覧会カタログの形式の始まりである。

こうしたヴィジュアル化されたカタログの出現によって、カタログは見られるものになる。それだけでなく、さまざまなかたちで美術を扱う美術書が、従来の読む美術書から見る美術書へと変化していく。19世紀前半までの美術書は読まれるものであった。18世紀以来の図版のない美術書(といっても、19世紀の前半には少しずつ図版が挿入されてくる)に比べれば、19世紀に誕生する見る美術書は、それまでの美術理解とは異なる様相をもつことになるだろう。図版入りの美術書は、一見、作品をより直接的に理解できると思われる。このことを考えるのが理論的部分である。

(4)まず、そのために18世紀の美術書を分析することにした。言葉だけによって作品を理解させていく美術書において、作品はどの

ように語られていくのかを考察した。その例として、18世紀の哲学者ディドロの「サロン評」を分析の対象とした。そこで作品(絵画を中心とする)は、言葉の描写という形式によって徹底的にイメージ化をはかられる。つまり、言葉によって作品が再現されようとするのである。19世紀の図版挿入は、この作品再現を印刷によって自動化した試みともいえる。印刷術の発展は作品の再現を容易にしたことも、図版挿入を促進した要因だろう。

しかし、言葉による再現と図版による再現とは、基本的に作品理解にあつて同等のものではない。言葉による再現は図版より不正確と思われるが、実際には、作品理解という点から考えれば、図版が正確で言葉がそうでないということはいえない。

先のディドロのサロン評において、作品は言葉によって、とりわけ同時代の人間にとっては、かなり正確に再現されていたからである。言葉によるその再現をベースとして、作品が説明され解説され分析されたのである。そこで作品は、言葉による統一性を確保しているといえる。しかし、図版が入る19世紀においては、言葉と図版の間に緊密な統一性は失われる。作品の再現を担う図版と、作品の解説や美的判断を担う言葉との間に一貫性がなくなるからである。言葉の量が多ければ、図版に再現された作品は、解説や判断によって解釈が行われてしまう場合も少なくない。図版が言葉によって作品そのものを変化させるのである。逆に、図版が、その直接再現性という観念(信仰)のせいで(写真印刷においては決定的になる)、図版と実際の作品の差異が自覚されないことも生じる。

19世紀後半から加速化していく「見られる美術書」は、実は、作品を見るためではなく、図版を見ることによって作品を理解しよ

うという事態を招くことになるだろう。19世紀近代に成立してくる人文科学としての美術史学は、まさに、こうした美術書で繰り広げられる言説を制度したものだともいえる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 島本 澁 「美術史は何を語っているのか」『美術史フォーラム21』(2006年vol. 13、36~39頁) 査読有
- ② 島本 澁 「一九世紀フランスの美術全集—研究ノートとして」『美術史フォーラム21』(2006年、vol. 14、30-36頁) 査読有
- ③ 島本 澁 「大学の匂い」『溶解する[大学]』(新記号論叢書3、慶應大学出版会) 2006年5月、100-106頁) 査読有
- ④ 島本 澁 『美術全集の研究』(平成15-17年度科学研究費補助金・基盤研究(c)研究報告書、代表島本澁) 2007年5月・査読有
- ⑤ 島本 澁 「画商の美術史—J.-B.-P. ル・ブラン(1748-1813)とカタログ」『日仏美術学会会報』(2007年5月、第26号、25~36頁) 査読有
- ⑥ 島本 澁 ”The Art Catalogue and Its Ecriture---From Representation of Space to Space of Representation”, in JTLA, vol. 33, pp. 1~14, 2008. 査読有

[学会発表] (計4件)

- ① シンポジウム「大正の『蠻』を『美』に昇華した富本憲吉の居住空間」司会・パ

ネリスト、2006年7月、於松下汐留ミュージアム

- ② 「画商の美術史—ル・ブランとカタログ」日仏美術学会、2006年7月、東京日仏会館
- ③ 「絵画論とマーケット—ロジェ・ド・ピールの自然模倣論から」日仏美術学会104回例会、2006年12月、京都大学
- ④ 「近代著作権以前における複製版画とオリジナル」芸術学関連学会連合主催シンポジウム『芸術は誰のものか—著作権問題を芸術学から考える』の発表者として。2007年6月16日、国立京都近代美術館

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

島本 澁 (SHIMAMOTO KAN)  
京都精華大学・芸術学部・教授  
研究者番号：30154280